

野中研究会ムスリム共生プロジェクト

名古屋モスク・岐阜モスク訪問交流活動成果報告書

野中研究会ムスリム共生プロジェクトは、2021年7月3日(土)名古屋モスクにて、7月4日(日)岐阜モスクにて、訪問交流活動を行った。当初、宿泊伴う形で研究会全員での両方のモスク訪問を予定していたが、コロナウイルス感染拡大による大学の規定において、学部生の宿泊を伴う研究活動が禁じられていたことから、やむなく、研究会メンバーを分ける形でそれぞれのモスクを日帰りで訪問した。本報告書にて活動の報告及び今後の研究計画について記載する。

○名古屋モスク訪問

名古屋モスクは1936年に建設されたイスラーム寺院であり、日本で2番目に歴史のあるモスクである。第二次世界大戦時に空襲によって消失してしまったが、1980年代に打ち出された日本政府による外国人留学生増加計画などの影響により、名古屋に居住するムスリムの人口も年々増加し、1998年に現在のモスクが完成した。近年では、教育機関や各種団体に向けたモスク見学及びイスラームの紹介を行っている。また Space for Young Muslim (以下、SYM とする) という、若いイスラーム教徒 (以下、ムスリムとする) の団体が名古屋モスクを拠点に活動しており、動画の作成やモスクに来た方々への説明など実際のイスラームの姿を広く発信する活動を行っている。

7月3日(土)は野中研究会からメンバー8名と野中先生、SYMのメンバーからは13名が参加した。以下の表は当日のタイムラインである。

第一部では、名古屋モスクで広報を担当するクレシ・サラ氏による、名古屋モスクの歴史やSYMの紹介後、イスラームの女性について説明頂いた。クレシ氏曰く、日本の人の多くは、「イスラームは女性差別の宗教」という認識があり、モスク見学に訪れた方々からも、そのような質問が多いらしい。そのため、イスラームでの預言者ムハンマドが生きていた時代の女性や、現代社会のイスラーム諸国にいる女性のリーダーの活躍を説明して頂いた。

第二部と第三部のディスカッションでは、SYMメンバーから日本で幼少期から育つムスリムとしての葛藤を聞くことができた。野中研究会の学生は、今まで留学生や海外出身のムスリムと交流する機会があった。ただし、日本語を話し、日本の学校に通って生活をしているムスリムと接した学生は少なかった。そのためSYMメンバーから学校にて、礼拝を行い、またどのように食事のイスラーム上の規律を守っていたのかを聞くことができ、とても学びが多かった。また野中研究会はほとんどがノンムスリムであることからSYM側から、「なぜノンムスリムなのに、イスラームについて情報を発信するのか」という質問もあった。自分たちがノンムスリムという立場で発信をする意義を考える機会となった。

7/3(土) 交流会タイムライン		
	時間	内容
第一部	14:15~14:45	クレシ・サラ氏からのお話
	14:45~15:00	野中研究会紹介
第二部	15:00~15:50	グループディスカッション (25分を2回)
	15:50~16:20	休憩 (アスール礼拝の見学)
第三部	16:20~16:50	全体でのディスカッション
	16:50~17:00	記念撮影



名古屋モスク外観



ディスカッションの様子



SYMメンバーとの集合写真

(撮影の時のみマスクを外しました)

○岐阜モスク訪問

岐阜モスクは岐阜大学に隣接しており、近辺に在住する留学生やパキスタン人を中心とするカーディーラーのムスリムを中心にモスク建設の機運が高まった結果、2008年6月に設立されたモスクである。その設立に際しては国内外からの多くの寄付が寄せられたほか、前述の名古屋モスクが多岐なるノウハウの提供・協力をを行い、現在の岐阜モスクの運営は名古屋モスクの傘下に入る形で行われている。

7月4日（日）は野中研究会からメンバー1名と野中先生で岐阜モスクを訪問した。

訪問に際しては、シリア出身のイマーム（モスクにおける宗教指導者）の方に岐阜モスクの紹介・質疑応答・モスク内部の説明を行なっていただいたほか、岐阜・名古屋在住のSYMメンバーとの交流も行なった。

岐阜モスクにおいては、1日5回の礼拝と金曜集団礼拝、イスラームへの入信手続、入信証明書の作成といったムスリム向けの活動のほか、イスラーム文化講座、アラビア語講座、モスク訪問受け入れなどノンムスリムを対象にイスラームやモスクに関する理解を深めることができるような活動を行なっている。（後者は現在COVID-19の影響で休止中。）講座には周辺住民など25名程度が各回に参加していたようで、「報道等で今まで聞いていたイスラームの姿とは違うイスラームの姿を知ることが出来た！」という参加者の感想も多く寄せられるそうだ。

そのような地域との積極的な関わりもあってか、行政との連携も活発であり、外国人市民会議への参加や各種国際交流イベントやシンポジウムへの登壇を多く依頼されるのだという。また、昨今のCOVID-19の流行に際しても外国人への各種情報提供の場としてモスクが大きな役割を果たしており、「外国人コミュニティにアクセスする窓口」といった存在になっているという。岐阜モスクへの訪問が野中研究会にとっては初めての地方モスクへの訪問であった。そんな中、モスクが行政と外国人をつなぐ核になっている点は大変新鮮かつ興味深い点であった。さらに、近隣の小学校においては、一学年60名のうち10名がムスリムの子供達という状況もあるようで断食や礼拝に際してフレキシブルに対応してくれているとのことである。岐阜出身・在住のSYMメンバーの一人は、「小学校において特に先生方が宗教に理解を示し様々配慮してくれていたことで、自らも興味を持って話を聞いてくる他の生徒に自信を持って自分の宗教について語ることが出来た」と話していた。また、イマームの方も岐阜県や岐阜市においてはムスリムや外国人という存在を大切にしてくれている雰囲気を感じると述べていた。この点、本研究会の大きな一つのテーマである「共生」について非常に有意義な視点を得ることが出来たと考えており、今後「外国人、ムスリム」だけでなく「岐阜県や岐阜市（行政）」「地域住民」といった視点からも深めていきたいポイントである。



○終わりに

今回の活動を振り返り、私たちが「宗教」というテーマを扱う研究会であるからこそ、「対面」で語り合い交流を深めることの重要性を改めて認識したところである。本活動を通して得た学びや気づきを今後の研究会活動に活かしてまいりたい。また、今回、同世代でムスリムの立場から積極的に発信を続けるSYMメンバーとの強いつながりを築くことが出来た。今後の様々な活動における連携を模索していきたい。日本に100ヶ所以上あるモスクであるが、その在り方は実に多種多様である。今後も様々なモスクへの訪問活動を行い、「学び」と「本研究会のムスリムコミュニティとのネットワーク構築」を深めていくことを考えている。

本活動の実施にあたり、見学・交流を快く受け入れて下さった名古屋モスク並びに岐阜モスクの皆様、そして助成を行なって下さった慶應SFC学会に感謝申し上げます。